巻　頭　言

ノラの孤独――考えるということ――

「ドラマの中の女性」の講義が終わった。なん年にわたるか、ずいぶんいろいろなヒロインを学生たちに紹介して来たことになる。「ロミオとジュリエット」のジュリエット、「ハムレット」のオフィーリア、ソフォクレスとブレヒトとアヌイそれぞれの「アンチゴネー」（アンチゴーヌ）、「夕鶴」のつう、「三人姉妹」のイリーナとマーシャ、「フェードル」、「楡の木蔭の欲望」のアビー、「ガラスの動物園」のローラ・・・・・。

古典的なドラマとは、一直線におのが欲望なり志なりを貫き通そうとして戦い、成功しあるいは破滅する。これは、いわば自然ないのちのほとばしりだと言うとすれば、それに対して、そのように行為する自分そのものに疑いの眼を向け、生の根底を問い直そうとする屈折が近代ということになるだろう。ハムレットの有名なセリフ「to be or not to be」がその典型だが、女性としてその代表を選ぶとすれば、「人形の家」のノラということになるだろう。私はかの女を講義の最後に置いた。

「人形の家」は、一般には婦人解放論のさきがけと受け取られ、ノラは女性の自立を声高らかに主張した女傑というイメージが世に広まっているようなのだが、原作のセリフをひとつひとつ読み合わせながら討論してゆくと、浮かび上がってくるノラの姿は、なんと初々しく、またおろかで、若さにまかせて懸命に生きようとするひたむきさであることか。

クリスマス前日、たくさんの買い物を抱え、歌いながら家に帰ってくるノラの姿からこのドラマは始まる。一週間後の新年から銀行頭取夫人になる、８年間の生活の苦労から抜け出せるという幸福の頂上で、かつて夫の病を救うために切端詰まって借金した時の、偽の署名を証拠に握った男の脅迫が起こる。ノラは、これが社会に暴露された時には、夫は、一身をなげうってかの女をかばい、その罪を自分で引き受けるだろう、と愛の奇跡を信じる。だが、それを起こして、夫を破滅させてはならない。だから、自分が死のう、とかの女は決意する。

だが、事実を知った夫の反応は、かの女の思わくとは全く異質のものだった。ノラを破廉恥女、はては犯罪人と呼び、おのれの社会的地位を守るために、うろたえ怒鳴りまくる身勝手な男の姿がむき出しになる。

夫の思いもかけぬ姿を見せられた時、ノラが信じていたことの一切が崩壊する。自分は妻としても人間としてもまともに扱われてなどいなかったこと、ただ人形として夫の手の中で可愛がられ楽しみの種にされていただけだったことに気づく。

「わたしはこの家で八年間、赤の他人と同棲して、他人の子供を三人生みました。おお、もう考えるのもいや、いや！　わたしこの身を引き裂いてしまいたい！」

かの女は底知れぬ絶望の中に一人立ちつくす。宗教も道徳も良心もなにひとつかの女の支えにならない。もはや意味がなくなってしまった。なにもかも自分で考え直してみなくてはなりません、ひとりになって、とかの女は言う。

かの女は新しい女の自覚に目覚めなどしたのではない。「こうするほか道はありません」とかの女は言う。これがかの女の選んだ、いやむしろ、追い詰められた孤独である。

しかし、人が「考え始める」とは、実はこういうことではないだろうか。

ハンナ・アーレントは、自分たちユダヤ系ドイツ人を逮捕、虐待、死に追いやった張本人、ナチスの隊長アイヒマンの、イスラエルの法廷における裁判を傍聴にゆく。そしてこの悪の権化と思っていた男の振舞いの、あまりの浅薄さにショックを受ける。かれはナチス時代と同様にイスラエルの法廷においても、紋切り型の答と慣習によって役割をこなしており、それを逸脱する――たとえ一個の人間としての責任の自覚といったようなことだろうと私は推測するだけだが――事柄になると途方に暮れるばかりだ。かれにはなんの思想も深い動機も見当たらない。いかなる悪の思想がそこにあるかを見極めるつもりでいたハンナは、予想を裏切られて、思いもかけない結論に到達する。

かれは、なにも考えていないのだ

「考えない」ということは、実は私たちの生活の中でもっとも従い易い強力な索引力を持つ行為だ、とかの女は考える。さし迫った時、慣習に従う以上のことをしない、ということは人間が常に行っていることだ。じかに事物にふれて傷つくことからおのれを守るために。悪の行為のためには邪悪の巨大な意志の必要はなく、ただ「考えない」ことから生み出される、と。

私はアイヒマンの姿に、少年の頃見た旧日本軍の軍人たち、特に下士官たちを重ね合わせて見る。ついで、学生の頃の友人であった高級官僚たちを、さらにさまざまな教員たち、企業の管理職たち、親たちを思い浮かべる。いや子どもたちを見ていてさえ、ユートーセイたちはセンセイのお先棒をかついで、こうしちゃいけないんだよ、あれはダメだよ、とほかの子たちを仕切りたがっているのが目につくではないか。つまりは下士官根性だ。私自身、軍国少年だった私が、アイヒマンにならなかったのは偶然に過ぎない。奴隷は奴隷に対して時に主人よりも暴であると魯迅は言った。

人間であること、人間になることの第一歩は、真にどこから始まるのか。

「考える」とはなにか、慣習と習俗に逃げこむ自分に気づくこと、新しく目ざめ始める行為はどこから出発できるのか、この一見安隠な、いや崩壊を目前にしているかのような、この世間的くらしの中で。

（竹　内　敏　晴）